

芥川だより

発行日 * 2021年9月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

印刷・発行 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



避けて通れない介護

「ばあちゃん、かみかみごっくんやで」と言いながら、ハイカロリーのゼリーをばあちゃんの口へ押し込む。彼女は、なかなか口を開けない。下唇をつよくかんで食べてやるもんかと無言の抵抗をする。16年前から認知症になり、さらに5年前から脳梗塞を患い寝たきり状態寸前をデイサービスと在宅介護でなんとかしのいできたのだが急に飲み込みが出来なくなった。

家内もいろいろ手を尽くしたが根切れして私に難儀な役が回ってきた。それまでも長年にわたり介護をしてきたのだが、飲み込めないという状況は次元が違う切迫感がある。人は食べなければ死ぬ。点滴や胃ろうをしても1年ぐらいの命だという。

86歳という年齢と病歴を考えれば早晚死は免れないが、そう簡単に見捨てるわけにはいかない。

若い時には想像出来なかった介護、祖父や親の介護を見てきたが介護の当事者でなかったためか他人事のように思っていた。介護施設に入れてしまえばいいじゃないかといった具合だ。しかし、介護で生死を左右する食事を任せてしまうと考え方は一変する。自分のこれまでの生き方・考え方が問われているように思えてくる。

最初は逃れられない役回りに愚痴も出かけたが、すぐに介護とは自分の問題なのだと気づいた。いかに工夫して楽しく食べさせて元気に毎日を過ごせるようにするかを考えた。ばあちゃんの無言の表情から気持ちをくみ取り、最低限度のカロリーと水分を飲み込ませる。握手や足裏をもんだり、ひょっとこのような顔をして笑わせたりして口を開けさせ水を入れる。口に入れた後は吐き出さないように注意しながら、ひたすら「ごっくんやで！」と言い続ける。ごっくんの音を聞くと一安心だ。これを何度も繰り返す。

私の熱意にばあちゃんも根負けしたのか1回の食事に2時間余りかかっていたが、今では1時間ほどになった。朝晩の食事の夢を見る事がある。ばあちゃんが吐き出す夢である。困難な事だが、今では私の生きがいのようになった。新たな挑戦である。絶対に1年以上元気で生きていて欲しい。まずは、3ヶ月を目標に日々精進したい。

死をめぐるあれやこれ(82)

石川 吾郎

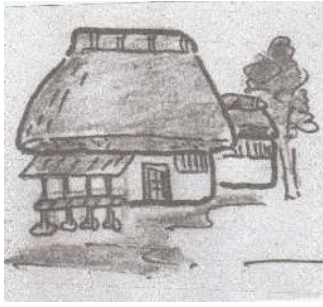
国民を救わない政府はいらない

今年の前半にメディアで盛んに叫ばれていた「医療崩壊」の語が、オリンピックが終わりデルタ型変異株が猖獗をきわめ収束が見通せず、「自宅療養」という名の棄民政策が国民にあてがわれる状態になった八月の下旬に、メディアからほとんど消えてしまったことに気づいた。入院管理をしなければ、状態が急変して一晩のうちに亡くなってしまう状態の人が自宅にほとんど放置され、救うことのできる命が救えない状態は「医療崩壊」以外の何物でもない。◆こんな状況になっても緊縮財政を堅持するスガ・自公政権は、ほぼワクチンのみを頼りとする政策を変えようとしなない。必要な経済的補償を拒絶して人流抑制に効果の低い掛け声だけの緊急事態宣言。日本国の財政は、国民一人一人に十数万円の補償を繰り返しても問題がないことは、昨年の財政出動でも明らかにされた(ハイパーインフレになるどころかデフレから抜け出せていない)。十分な経済的補償がされれば、流行を抑え込むことは可能なほど人流を減らせることは明白。◆あとは政府が本気で国民の命を救うための十分な財政出動をして、それによって有効な政策を至急に実現することだ。家族を救うためのわずかな希望のために酸素ボンベの確保に必死となったインドの人々の姿が、日本で再現

される悪夢の可能性はまだある。だが政治を変えるチャンスは近い。それがこの秋の総選挙。国民を救おうとしない政府をとり変えるのだ・・・

芥川だより一七六号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 82	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 90	坂本一光	2
哲学者の時事放談 40	祖藏哲	4
大峰奥駈道 46	下村嘉明	7
新型コロナウィルス愚考 (17)	明石幸次郎	8
オクラの山たより 60	因了生	9
隠された歴史 35	満田正賢	11
道をゆく 29	成瀬和之	14
マルクスから学ぶ (7)	成瀬和之	15
俳句	土田裕	16
	杉山武司	
編集後記	S K 生	17
ふみの道草 39	山椒魚	18



素老人☆よもだ帳 (90)

坂本一光

◆食うことと働くことと生きること

思えば遠くへ来たもんだ。比べようもない話だが、人類もボクも。食うことと働くことと生きること——この三位一体の関係を問い直さなければ人類にもボクにも未来はないのではないか、そんなことをふと思った。未来に関わる、その点から言えばこれは永遠の問いである。

さて本論に入る前に言うが、このことについては父の思い出とともに既に書いた(素老人☆よもだ帳(2)、『芥川だより』No.88,2014.5.1)。昔の文章を読むのは我ながら恥ずかしい思いであるが、参照の手間を省くため以下に引用しよう。

○はじめに

子どもは親の背中を見て育つ、という。実際に親の背中を見たかどうかは問題ではない。小さい頃に聞いた親の何気ない会話を大きくなって何かの拍子に思い出し、こんなことを忘れないでいたと気づくというようなことのなにも、ある意味では親の背中を見て育った結果があるかもしれない。そういう話から、素老人よもだ帳を繰ってみたいと思う。

明治四十年(一九〇七年)生まれの父は、

家では「そんなこと言わんでもわかっところがや」ともの言わぬタイプであった。しかし、外ではよもだだったのではないかと私は思っている。一方、大正三年(一九一四年)生まれで七歳年下の母はいつも、「言うてくれなウチにはわからん」と愚痴を言っていた。その父母の問答というか、結果としては父一人の自問自答に終わったこんなことがあった。

○食うために働くか働くために食うか貧しさゆえの父母の問答

はつきりとは覚えていないが、私が小学校二、三年生の頃だろう。遅い昼飯を食べに父が帰ってきた。父は町の郵便局に勤めていて、保険の外交を担当していた。農家の人たちが昼飯に家に戻る時を見計らって訪問し勧誘するためのだろう、自分の昼飯の時間をずらすくらいのはあったようだ。帰ってきて飯を食べながら珍しく父が口を開いた。

「今日、みんなと話しとったんじゃが、人は食うために働くんか、働くために食うんかという話になつてのう、みんなは、そんなもん食うために働くんに決まっとらい、と言うんやが、わしは働くために食うんやと思うがのう。どうじゃるか」

母は何も言わず父に飯を盛っていた。しかし、「親子七人(ついでに言ううと、私は男五人兄弟の末っ子である)、毎日食べていくのにひいひい言っているのに、男はよもだやのう」くらいは思ったはずだろ

う。今思えば、父の自問自答を聞いた私は父以上によもだであったかもしれない。学校から帰って麦飯の冷や飯が残っていると親に隠れて醤油をかけて食っていた私は、「飯を食うのは腹が減るからだ」と何の疑問も感じていなかったのだから。この経験は私に、大人というのは子どもが思いつきもしないような大きなこと、なにかそら恐ろしいことを考えているものだ、と教えてくれた。

○食うことと働くこと、そして生きること
今思えば、食うことと働くことに加え、もう一つの視点が必要だろうと思う。それは、生きるという視点である。

食うことと生きることの関係は言うまでもない明白な関係である。食うためには働かなければならないという意味での食うことと働くこととの関係は、社会が個人に労働への参加を求める必然の関係である。よほどの資産家でもなければ、働くことから自由な個人はいない。働くために食うんじゃないかと父が言ったとき、父は働くという言葉に生きるという意味を重ねていたのだろうと思う。働くことと生きることの関係は誰もが問わなければならない関係である。

以上述べたような父母の問答を私が思い出したのは、次のような先人の言葉に出合ったときである。

「わたしたちは、いわば、二回この世にうまれる。一回目は存在するために、二回

目は生きるために」(ルソー『エミール』

(中)、5頁、岩波文庫)この言葉が下敷きにあるのかどうか、数年前のNHKドラマ『大仏開眼』中のセリフに、「人間は二度死ぬ。一度は肉体が減んだときに、二度目はその死を社会が忘れたときに」とあって驚いた記憶がある。それはさておいて、人間が生きること、死ぬことは社会と深く結び付いている。「人間はいつ自分になるか」と問いかけた哲学者は、「自分になる」とは、社会の中の自分の位置に気づき、社会に向かって働きかける方向を決める」ことであり、そのとき「人が生まれる」と書いた(鶴見俊輔『人が生まれる』五人の日本人の肖像』筑摩書房、一九七二年)。

こうした先人の言葉を読むと、大人は恐ろしいことを考え、また言うものだ、とこの歳になっても思うから不思議だ。「お前はいつ自分になるのか」とまだ言われている気がする。よもだよもう。

さて本論である。食うことと働くことと生きることに素老人の関心が改めて向いたのは、先日のズーム講演会『中国はどこへ』を聴いたときである。これは二回目の講演会で、一回目は『中国情勢の特徴』であった(山本恒人大阪経済大学名誉教授、日本科学者会議大分支部主催)。詳細は省くが、『改革と開放の四十年』を経て『百年未有之大変局』(中国共産党十九期

五中全会コミュニケーション、二〇二〇年十月二十九日)と自ら情勢認識をする中国はどこへゆくのかメインテーマ。政治、経済対米関係などの今日的な問題から、かつての内モンゴルやチベットなどの少数民族問題、今日の新疆ウイグル族や香港をめぐる問題など話題は広範であった。その中で、講演の最後に紹介された二つのコメントが素老人の興味を引いた。一つは、

『自信過剰か不安症か』『日本経済新聞』二〇二一年七月三日・オピニオン・本社秋田浩之。「習政権はなぜ、各国を敵に回して超大国への道を生き急ぐのか」。これには二つの仮説があるという。第一の仮説「国力を増し自信過剰になっている(リーマンショック対応、コロナ危機対応の成功)。第二の仮説「油断したら九十年に崩壊したソ連の二の舞に。このような習氏の不安が強硬策に(経済格差、少数民族との軋轢、失業への不満、体制動揺の抑え込み)」。正解はいずれか片方ではなく両方と見るべき。自信過剰と不安症併発。その分冷静さを欠いた行動に出る危険も高まる。「デジタルやハイテクを装備し、駆使する共産党は盤石に見える。しかし気がかりなのは少子高齢化(二十二年から総人口現象期予測)」。共産党が民心をつなぎ止めてきたのは人々の生活底上げに成功。改革開放の鄧小平の功績。豊かさが頭打ちになれば、共産党の正当

性は揺らぎかねない。』

そしてもう一つは、フランシス・フクヤマ(スタンフォード大学FS国際研究所上席研究員)のコメント『朝日新聞』二〇一四年十一月八日「オピニオン・インタビュー」。

『中国は最も早く『近代国家』を成立させました。官僚制があつて中央集権的で、能力本位で、さほど縁故主義ではない。中国はそうした制度をつくるのが得意です。ただ、そこには、『法の支配』や『民衆に対しての説明責任』という仕組みがない。この二つは国家を縛り、国家権力が公共的な目的で使われるよう担保するものです。』「権力行使に制度的な抑制がきかないため、中国に悪い皇帝(トップ)が出たときには、対処する方法がない。これは歴史的に中国が抱えている問題で、未解決なままです。』

どちらのコメントも当たっているのであるが、素老人が先ず思つたのは、「法の支配」や「民衆に対しての説明責任」の仕組みがある米国においても、今日なお人種的背景を異にする人々の間に解決しがたいほどの政治経済社会的問題があることであつた。また、強権的なタガが外れたとき、異民族を束ねていたソ連邦やユーゴスラビアが傍目にはいとも簡単に一夜にして崩壊し、血で血を洗う民族紛争や国家分裂まで起きたということであつ

た。

民族やそれに根ざした文化文明の多様性と、その中で生きる個人の多様性は、民族自治権や基本的人権としてまた個人の尊厳として、国家という枠組みを越えて何にもまして尊重されなければならない。それを踏みこむ強権は必ず滅びる。その道をゆけば、中国もまた然りである。歴史はそれをいつまた繰り返すだろうか。

中国にはどれだけの民族があり、それぞれがどういう比率であるのか、その実態はどうであるか、素老人は知らない。うる覚えの知識で振り返れば、中国には漢民族はもとより幾つもの異民族の王朝が生まれては消えた。どの王朝も、内に多くの異民族を抱えると同時に、遠く周辺国家まで従えようとしてきた。早くに開花した文化文明に支えられて覇権を唱えることができた大国であつたことは確かであるが、いまや、「見渡す限りの、知りうる限りの世界は我がものである」とするのは、人知の成しうることを遙かに越えた僭越で傲慢なこととしか言いようのないものだろう。そこに人類の未来も、ボクの未来もない。

人知の及ぶところは、個人であれ、国家であれ、限られている。驚くほど狭いと思つている方がいい。食うことと働くことと生きること―個人も国家もそれを考えていれば十分幸せになれるのだと、素老人はまたまた「よもだ」なことを考えてしまった。

これはほとんどイマジン (John Lennon, 1971) の世界であるが、わが故郷の名誉町民、坂村真民 (1909 - 2006) も言う『念ずれば花ひらく』。

歴史を見てみるがよい

民族も国家も個人も

みな繁栄のために滅んでい

持たなくてもよいものを

持ったがゆえに自滅した

それにしても、人間の英知はどこから

始まりどこへ行くというのか。

すべては君の「知りたい」からはじまる

疑問が発見を生み、一つの発見が新たな発見を呼び、

それらが集積されて知識となり、知識の体系が知恵に結晶する。

ひたむきに繰り返されてきた未知の扉を開こうとする人間の営み。

人類は「知る」ことによって生きてきた。

地球に誕生した直立歩行するヒト―火を用い、道具をつくり、言葉を使うことによって、ヒトは今まで生きてきました。

身近な動植物の採取から始まり、狩猟、農耕、気象、天文、芸術、宗教、法律、経済、科学技術…人間を知り、自然を知ることによって築き上げられてきた歴史の延長線上に、現在、わたしたちが立っています。

学ぶことの厳しさを通して得られる喜びは、闇を恐れたヒトが火を得た時にも、収穫に胸ふるえた時にも、思索を言葉に表せた時にも、文字を発明した時にも、蒸気を操ることができた時にも、

病気の人の頬に笑顔が回復した時にも、そして宇宙から地球を見た時にも、そこにいた人たちが体中で感じた喜びに通じるものではないでしょうか。

二十一世紀を目の前にして、人類はさまざまな問題を抱えています。

それらに取り組み乗り越えることが、過去から、そして未来から、わたしたちに与えられた使命です。

すべては君の「知りたい」から始まります。

これは「堀川の奇跡」と言われた京都市立堀川高等学校が、一九九四年四月一日に京都市内の中学生に向けて呼びかけた『学校案内』の一節である。「堀川の奇跡」はさておいて、子どもであれ大人であれ、

人が学ぶことの本質的な意味を深く問う思いがあふれている。学ぶことの意味を問う、それは生きる意味を問うことと同義でもあるだろう。

すべては「知りたい」から始まった世界が、絶望に終わっていないはずがない。

(かたちは心であり、心はかたちになる)

■大分の素老人

依然として新型コロナの勢いは収まらない。その死者数の世界累計は今や440万人を突破。歴史的インフルエンザ・パンデミック歴代2位の1957年アジア風邪200万人をすでに今年の初めに抜いて新歴代2位に登りつめている。インフルエンザの歴史的最大のパンデミックは1918年のスペイン風邪である。桁が上がり4、000万人以上が死亡したとされている。当時と違い各段に医学が発達している現在、さすがにここまではいかないと思うが不安は尽きない。その医学が発達しているとされる米国でさえ、感染者、死者数が世界のトップであるからだ。米国では累計死者数が現在63万人。第二次世界大戦40.5万人、南北戦争60万人をすでに超えて国家的危機状態である。

さて、このような世界的パンデミックの状況の中で決行された周回遅れの2020東京オリンピックは8月3日に終了した。続いて3週間後の24日から9月5日までパラリンピックが行われている。だが、いずれも開催については多くの問題を抱えていた。今回の両大会の基本テーマは「全員が自己ベスト」「多様性と調和」「未来への継承」である。

「ト」は相変わらずのメダル獲得競争「勝利至上主義」と矛盾する。以前にも書いたが、そもそもスポーツというものは「余暇」「遊び」を起源として生まれた近代概念である。子供はほっておいても「遊び」において勝手にルールを作り別に順位を争うわけでもなく生き生きと体を動かし楽しむ。これが本来のスポーツである。メダルを何個獲得したとか、どの国を負かしたかというのは「ナショナルリズム」「自国中心主義」「商業主義」の現れ以外のなものでもない。特に最近の日本は失政による国力の低下が著しく、政権はその信頼回復に躍起になり、責任追及回避にオリンピックは最適のイベントである。そして第三テーマ「未来への継承」も今や人類生存の世界的危機にあり生命、経済問題とも「負の遺産」となってしまった。結局のところ、残る第二テーマ「多様性と調和」がそれらの真実を覆い隠す「フェイク」として欺瞞的に使われているのである。

オリンピックとパラリンピックは同じ競技場を使用している。しかし、パラリンピックでは少し様子が異なるところがある。よく見ると企業の広告看板が許されているのである。オリンピックは表面だけは頑なに「商業主義」を否定している。けれども近代オリンピックに遅れること64年、1960年に開始されたパラリンピックはすでに商業主義に汚染された時代。企業スポンサーなしでは成り

哲学者の時事放談 (40)

祖蔵 哲

立たない興行となっていた。そして、企業側の方も「多様性の理解」というイメージアップのしたたかな狙いもあった。

このように「多様性」はその本質が十分に議論され理解されないまま、なんとなくの「イメージ」によって商品化されていった。今月はこの「多様性」を哲學しよう。」

(1) 多様性とは何か

最近では各方面で「ダイバーシティ」という英語のまま使われるようになった多様性とは、『幅広く性質の異なる群が存在すること』を意味する。性質に類似性のある群が形成される点が特徴で、単純にバラバラに「いろいろある」(バラエティ)状態とは異なる。「バラエティ」は「同じ種類の中での違い」を強調するが、「ダイバーシティ」は「そもそも種類が違うこと」を強調する傾向にある。もともと、世界に存在する「個物」は同じものは二つとしてなく「バラバラにいろいろある」のが現実的「事実」である。その世界で人間が恣意的に名づけ、個物をグループ分けする。本来バラバラあるものが一つのカテゴリーにまとめられ「概念化」された「言葉」が生まれるのである。

このように「多様性」とは世界の「事実」から人間が恣意的に作り出す概念である。

(2) 「多様性」の歴史

「多様性」の概念は西欧近代的なものであるが、その変遷は大きな振れを経験している。近代以前の社会は階級社会であり多様性というより各階級の中での単一性が求められていた。近代国民国家が形成されて、この階級が解消されたところからかえって国民的統合が求められ「多様性」は重視されなくなっていた。変化を起したのは現代社会からである。

近年、経済文化のグローバル化により、特定の文化や地域を持つ問題解決的発想の喪失などのデメリットが憂慮され、文化多様性・地域多様性などが重要視されるようになる。この傾向は「多様性」がただ単なる「事実」ではなく、「価値」の問題として認識されてきたことの変化である。「価値観の多様性」自体も概念化された。

この背景にあるのが自然科学における「進化論」解釈の影響である。進化論では環境に適応する面から、画一的な生物群よりも多様性を持った生物群の方が生き残りやすいと考えられている。環境に变化が起きたとき、画一的なものでは適応できないかどかかの二択であるが、多様なものはどれかが適応し生き残る為の選択肢が多いからである。また多様性を維持するためには、多様性そのものが必要であると考えられ、進化論・複雑系の観点からは、「壊すのはたやすく、作り出すのは至難(多様な状態を生むのに非

常に長い時間が必要となる)」なものである言われている。

つまり、「多様性」はこの進化論の考え方、如何に人間が生き延びられるかという有用性の「価値」に基づく概念として作り出されたものである。1992年6月に締結された「生物の多様性に関する条約」の前文は、「締結国は、生物の多様性がある内在的な価値並びに生物の多様性及びその構成要素が有する生態学上、遺伝上、社会上、経済上、科学上、教育上、文化上、レクリエーション上及び芸術上の価値を意識し」という表現から始められている。しかし、「進化論」は単なる「歴史の結果」を理屈化したものに過ぎないことを考えなおさねばならない。現在の歴史は偶然の結果であり、人間の作り出した概念の「多様性」がその結果を生んだ原因ではない。まだ恐竜が支配する地球もあり得るし、ネズミが支配する地球もあり得る。この多様性は決して人間だけに有利なものではない。

今後この「多様性」概念が人間を生き延びさせると保証はどこにもない。むしろこれは「人間中心主義」(ヒューマニズム)の概念が多分に入っている。ここに問題があるのは「自然科学的誤謬」すなわち「事実」と「価値」の混同である。

(3) 多様性の事実判断・価値判断 オリンピックのテーマ「多様性と調

和」に反対ではないがなんとなく胡散臭い、しっくりこないのはオリンピック組織や国家組織という特定の権威が上から目線で言うからだけの理由ではないように思われる。この原因は、多様性というのは(1)でも説明したとおり現状を示す結果論、「事実」であって、こうであるべきという「価値」観の問題ではないと薄々思っているからである。これが、事実判断と価値問題判断の問題である。

例えば「自分のものを盗まれたら、その人は困るし悲しむ」は事実判断である。だから「人のものを盗むのは悪いことだ」という価値判断ができるかどうか。哲学の一分野である論理学ではこの論理は間違いとされている。なぜなら、同じ事実判断から「だから人のものを盗むことは良いことだ」という価値判断を導いても論理的には矛盾しないからだ。生活に困って人のものを盗む泥棒にとつてはこの価値の方が正当となる。したがってこの「事実判断」から「価値判断」が導かれるというのは状況によっても異なり全くの誤りである。

「事実判断」から「価値判断」が導かれているように思ってしまうのは、実は人は意識しなくても「人は困らせたり悲しませたりするのは悪いこと」という暗黙の価値判断が前提にされているからだ。論理学の代表的論理推論である三段論法を使えばより明確になる。

【大前提】「人のものを盗むとその人は困るし悲しむ」(事実判断)

【小前提】「人を困らせたり悲しませたりすることは悪いことだ」(暗黙の価値判断)

【結論】「人のものを盗むことは悪いことだ」

重要なのはこの【小前提】の暗黙の価値判断こそが道徳判断と言われる、単なる個人的な趣味の問題ではなく、皆が共有すべき判断なのである。

「多様性」に関しては、単なる「自然的進化論」としてその方が生存に有利だからという「有用性」の問題ではなく「倫理」の問題として考える必要がある。

(4) 道徳倫理問題としての「多様性」

「多様性は尊重すべきである」という「べき価値判断」は個人の感覚判断とは別の判断基準に従うということである。しかし、この判断基準をどのように設定するのかについての全員の合意は難しい。そこで基準を絶対的なものでなく

「相対的」なもの、つまり場合により使い分けるといって「相対主義」の考えが出てくる。これは近年主張されている「文化相対主義」といわれるものにも見られる概念でもある。ある国の文化では「善い」と判断されることが、別の文化では「悪い」と評価されることはよくある。

日本では麺類などを食べると、ずるずると音を立てるが、西欧では悪いマナーとされるなど多々ある。このように「道徳相対主義」も、『ある個人にとって』という形でしか成り立たない面が強い。それゆえ単なる道徳も「多様性の尊重」の価値原理になり難い。

と音を立てるが、西欧では悪いマナーとされるなど多々ある。このように「道徳相対主義」も、『ある個人にとって』という形でしか成り立たない面が強い。それゆえ単なる道徳も「多様性の尊重」の価値原理になり難い。

(5) 多様性のパラドクス

「多様性」を少しは疎ましく思っている一方の原因は、現在、自分自身がその「価値」分類の多数派に属しているため今更少数派の立場に関与するのが煩わしいからであろう。さらに問題を複雑にするのが、多様性を認めるといことは「多様性を否定」という考え方も受け入れなければならないということだ。これはパラドクスだ。

ある言明とその否定が、ともに論理的に同等と思われる論拠をもって主張されているとする。これらの二つの言明が成り立つと結論する推論のなかに誤りが含まれていることを明確に指摘することができないとき、これら二つの命題を、パラドクス(逆説)という。有名なのは、エピメニデスのパラドクス「クレタ人はうそつきである」とあるクレタ人は「クレタ人はうそつきである」という小前提が正しければそのクレタ人はうそをついたことになり、小前提がうそであればそのクレタ人はうそをついていないことになり、いずれにしても全体の命題は成立しない。

これらのパラドクスの解決法は今現在に至っても議論されている、至極古くて新しい問題である。例えば以前議論した自由の問題も同じである。自由を重んじるなら他人の自由を奪う自由も認める必要があることになる。希望的なパラドクスの解決策の一つはバートランド・ラッセルが提案した「二段階法」が有効である。「多様性を尊重しない」という多様性に対して、まず「マイノリティーなどの排除」を第一段階の排除とし、そして第二段階として「この排除する者たちを排除する」ことだ。第一段階は「多様性」に属すが、第二段階は多様性ではないという言う考えであり、ラッセルの専門である集合論から導入されている。非常に説得力のある理論である。それゆえ「ヘイトクライム」は許されるべきではないことになる。

(6) 「多様性の尊重」の葛藤を回避する社会思想

道徳の押し付けは多様性自体を否定することになるため自己矛盾を引き起こすということが分かった。では個々の多様性を尊重しつつ社会全体の価値、幸福を大きくするにはどうすればいいかと考えたのが「功利主義」である。これは「帰結主義」といわれるように、「くすべき」という「義務」から行為を行うのではなく、「結果」から判断してその行為を行う、つまり「有用な結果をもたら

す過程」が重要であるという思想である。これは現在のアメリカを構成する「プラグマティズム」につながる考えの基礎になっている。つまり、「多様性の尊重」はそれが社会の発展にとって有効であるからそれを尊重するという逆転の発想である。しかし、これがどこまでの将来まで有効なのかとか、その進行が逆作用を及ぼすのではないかという疑問には答える根拠を持たない。また、同時に「幸福」とは何かも問題になる。「幸福」お金」であれば「商業主義」の社会が称賛されるし、「格差」が広がっても全体の幸福のために個人は我慢しなければならぬことになる。

以上、今月は「多様性」について哲学した。いつものように自明、わかっているつもりであった言葉や概念がよくよく考えてみれば「あやふや」であったことが判明する。ともあれ、「多様性」についていえば、お互いに相違を認めて「寛容」になるということになる。しかしそれでも「不寛容な人にも寛容になる」というパラドクスは残るが、冒頭でも述べたが、そもそもこのような「概念」を作り出したのはひとり人間である。もともと世界は「在りのまま」であり「善悪」などの区別は存在しない。この人間特有の葛藤を回避するには究極的には「人間であること」すなわち「尊厳の尊重」ではないと考える。さて「尊厳」とは何かはまた別の機会に哲学しよう。

大峯奥駈道 (46)

下村 嘉明

役行者のゆかりの地は多い。愛宕山や六甲山にも祠の中に役行者の石像が祀ってある。1300年も昔の話だから実在した人物かは分からないが、山岳信仰の象徴として偶像化されたのかもしれない。事の真相は分からずとも、多くの人が山を崇め参拝に詣でた事は事実である。山は水や木など生活に必要な多くのものを人々にもたらした。山のお陰で生活できている事を昔の人は強く感じていたのだ。

険しい山で修行を積み霊力を得た修験者は、雨乞いの儀式や厄払いを行い人々に修験道の魅力を伝え、山岳信仰を榮えさせたのだろう。今でも護摩供養は神社などで行われている。

願い事を書いた護摩木を燃やし般若心経が唱えられる。

修験道の魅力は、険しい山に登り汗をかかなければならない事だ。心身ともに労苦をいとわない姿勢が、逆に人々を引き付けたのだろう。今の様に楽しい事があふれている時代と違い昔の人にとっては、大きなエンターテイメントであったのだろうか。

神仏離れが進む昨今、以前のような山

岳信仰が復活することはないだろう。しかし、根強い修験道が消えてしまうのは残念である。通常の登山でも、歩行中にあれやこれやと自問する。繰り返し自問することで心のバランスを保つのである。

ある時は、もう苦しいからやめようと思いい、頂に立って清々しい風景を目にすれば、登ってきてよかったと思う。刻々と変わる心のドラマを幾度も見ることになる。

修験道は、一般の登山とはかなり違って、精神世界の山登りだ。山登りを舞台にして、人間の欲望を捨てることを目標にして、般若心経を唱え、蔵王権現の像に手を合わせる。いかつい蔵王権現の目を見ていると圧倒される迫力がある。この迫力でもって人の煩惱を焼き尽くし捨て去って、新たな人間に生まれ変われと。我々を悩ますのは欲だ、様々な煩惱が人を苦しませる。この煩惱を護摩木にたとえ空高く焼き尽くし、煩惱を捨てて新たな心を持つ。

このような修験道は、他のスポーツにはないだろう。早く走れ、高く飛べといったスポーツでは、記録が目標であって、精神世界を目標にしているわけではない。

この違いは、非常に大きな違いだ。オリンピックの精神と日本古来の山岳修験道は全く違う。先月から行われた東京オリンピックはコロナ禍であったために批判も多かった。エンターテイメント化したオリンピックは国家から離れたエンターテイメント会社が経営すればいいじゃない

かというのが私の素直な意見だ。

何事も競争、ランキング付け、ごく一部の人が注目が集まり多くの人は蚊帳の外、今に始まった事ではないが、こんなことが人類の発展に寄与するとは到底考えにくい。いくら科学が発展しても人の幸福にはつながらない。問題は、人の心・精神世界を豊かにタフにすることだ。バランスの取れた思考は、常に心のバランスから生まれる。少しでも偏った方向に進めば、争いごとになり戦争へとつながりかねない。

自立した個人個人の思考と行動は何より平和な社会への道であるが、人は周りの流れに流されやすい。自立した思考には、勇気も実行力もいる。

このように考える私は、日本古来の山岳信仰は、日本人の心情に合うのではないかと思う。確かに、経典と言えものも少ないし、伝承される儀礼や古跡も絶滅寸前だといえる。西洋文化の影響と近代化でもって衰退の一途をたどっている。役行者や弟子たちが聖書のような経典を残していたらまた違っていただろう。

しかし、1300年前には紙は一般化していなかった為に、記録することが困難だったのだろう。もし、役行者が書いたり言ったりしたことが、記録として残り現在に伝わっていたら素晴らしい事に違いない。

今回の大峰講の宴席で私は酔った勢いで「来年は、同級生など10人を連れて参

加します」と大見えを張った。年々参加者が減る講への激励の挨拶から10人という数字が口から出てしまった。さすがに他の参加者から驚きの声があがった。参加者の想いを幾分か逆なでした言葉だとすぐに感じたが、言ってしまった以上取り消しは出来ない。もちろん私は、来年も参加するつもりだが、10人をどうして集められるか目下思案中である。

どうか、読者の中で大峰講に参加しそうな方があればご一報ください。男であれば、年齢・住所は問いません。京都丹波大峰講は、来年6月最終の土・日曜日です。重ねてお願い申し上げます。



新型コロナウイルス禍愚考(その17)

明石 幸次郎

長引くコロナ感染流行の拡大で、仕事を失ったり、収入が減ったり、又、人との交流が減り、先の見通しが立たない不安感が国民の間で高まっています。

その中でも、世論の反対の中、菅首相はオリンピックの開催を押し切り、その後押しを、病気で退任したはずの安倍さんが、なぜか元氣になり、マイナーな月刊誌の櫻井よしこさんとの対談で「共産党に代表されるように、歴史認識などにおいても一部から反目的ではないかと批判されている人たちが、今回の東京五輪開催に反対しています。朝日新聞なども明確に反対を表明しました。野党は五輪の開催で日本から海外への感染拡大を懸念している。それは、菅政権を引きずり下ろすために五輪を政治利用しているといわざるを得ません」と批判したことを受けて安倍さんは「彼らは、日本でオリンピックが成功することに不快感を持っているのではないか」と東京五輪に反対する人は「反日」とも受けとれる発言をしました。政府、俺が決めた？五輪に反対する人は「反日的」と決めつける物言いは、戦前は、政府の政策に反対する人を「非国民」として恫喝した旧陸軍を思い浮かべた人もいるのではないですか？

そのような後押しにより、オリンピックは開催されました。金メダルの数はアメリカ、中国に次ぐ27個獲得し、菅首相はゴールドメダリストにあやかろうと電話をして人気取りをしましたが、その間もコロナ感染者は増え続け、今や、第5波と言われ一日2万人以上の感染者数となつています。

菅首相は、オリンピックの開催で支持率を高め、総裁選と衆議院選を有利に展開しようとして「政治利用」に賭けましたが、コロナ感染者数は増え続けて、緊急事態宣言、まん延防止などの対策を発する度に記者会見を開いて、国民に訴えかけ不要不急の外出を控え、テレワークの要請などを念仏のように唱えています。

その度に説得力のない言葉だけを繰り返して発し、最後は「国民の命とくらしを守る」ことを優先すると締めくくりますが、学習能力に欠けるのか、取り巻きに問題があるのか、幾度か会見を開いて、宣言を発してませんが、政治的パフォーマンス力は何ら向上せず、肝心な国民の不安感を少しでも和らげ、言葉を通じて政策実行力に信頼感を抱かせるといことが何も感じられません。それが、内閣支持率26%、不支持率66%(毎日新聞8月28日調査)に表れています。

菅首相は、総裁選と衆議院選を有利に展開しようとして「政治利用」に賭けましたが、コロナ感染者数は増え続けて、緊急事態宣言、まん延防止などの対策を発する度に記者会見を開いて、国民に訴えかけ不要不急の外出を控え、テレワークの要請などを念仏のように唱えています。

その度に説得力のない言葉だけを繰り返して発し、最後は「国民の命とくらしを守る」ことを優先すると締めくくりますが、学習能力に欠けるのか、取り巻きに問題があるのか、幾度か会見を開いて、宣言を発してませんが、政治的パフォーマンス力は何ら向上せず、肝心な国民の不安感を少しでも和らげ、言葉を通じて政策実行力に信頼感を抱かせるといことが何も感じられません。それが、内閣支持率26%、不支持率66%(毎日新聞8月28日調査)に表れています。

長引くコロナ禍で、一番ダメージを受けているのは、シングルマザーなどの女性ではないでしょうか。先行きが不安から大きな心身的、経済的な大きな負担がかかり、子育てなどで押しつぶされかかっている女性が増え、それに耐えきれず、自殺する女性が増えているというデータがテレビ、新聞などで報道されています。

実際、ボランティアの電話相談でも、コロナの影響で、パートの仕事が半減して収入が10万円以下になり、経済的に困窮して、満足に子供に食べさせていくことも出来ない。それで最後の望みとして、プライドを捨てて、生活保護の申請に役所に行ったが、窓口で言われたことは、生活をサポートしてもらえない兄弟、親はいないのか、なぜその人に連絡は取れないのか、離婚して養育費はどうなっているのかなどと、事情があるので触れてほしくないプライバシーを侵害するようなことを色々と言われて申請する気がなくなりましたと言われ、私のような人間は世の中の負担になり、存在しない方がいいということですか！とか、

主人が飲食店を閉めることになって、幾ばくかの補償金を貰ってそれで借金を返したら、何も残らず、それでやけになって、朝から何もすることがないので、酒浸りで、最近私とか、子供にまでイライラして暴力を奮うまでになっている。子供を守るために離婚して家を出るしかないのか、それにしても、今まで頑張ってきた夫を捨てて出ていくのも？今は手持ちのお金がないので、パートで働いているが、コロナで子供が家にいることが多いので、心配で、どうしていいかわからない！この先がどうなるのか、全然見えないので、本当に精神的にしんどくなり、最近子供に当たるようになっていく。そういう自分が嫌になっている。自分が頑張らないといけないのは、分かっているが、主人もサポートしてあげないと思っても気持ちと身体がばらばらで何も出来ない。このままだと、パートにもしんどくて行けないし、もう、生きていくのがしんどくてどうしようもない！と涙声になり苦しい心情を訴えられました。貴女もしんどいと思いますが、子供さんが一番、しんどいのは？ コロナで父親が仕事を失い、ご両親の関係が悪くなつて、自分にも当たってくる。自分が何か悪いことをしたのか、何でこんな目に合わないかんのや、分からない。それを両親に言えない、誰にも言えない。本当に、辛いのではないですか？子供さんなりに苦しんで、両親の仲が悪くなったのは、自分のせいだと思ってしまうのではないかと、せいでど、どうか、一度、役所に助けを求め、声を上げて相談して下さい。必ず、何らかのサポートがあるはずですよ。首相が命とくらしを守ると、何回も言っていますよ！ コロナで困っているが、今までご主人も頑張つてこられたのですから、公的な支援を受けて、何とかこの苦しい状況を乗り越えてください。日本人は大変人しくて、真面目なので、このコロナ禍の中でも自分の努力が足らなかったのではとか、他にやり方があるのでは、何か頑張れば出来るのではと、ついつい問題を自

分にあるのではと思ってしまうがちです
ね。と自分の意見を言っていました。

この30代の女性の苦しい胸の内を共感して寄り添って聞くだけでは、一時的には苦しい気持ちを私に聞いて貰うことで、少しは軽くなったかもしれないませんが、この女性が抱えているコロナ禍の経済的苦境を救うことには、何もつながりません。

私が咄嗟に浮かんだのは、国民の皆さんも不要不急の外出は控えるようお願いします、という、しらっと言いわける菅首相の顔でした。コロナ禍の中で「命とくらしを守る」と首相は言いながらも、一方では国民の自助、共助、公助をうたっている。一番苦しめられている経済的に弱い立場のこのような電話をかけてきた女性に、まだ自助努力をせよと言うのか？今こそ政府の公助による経済的なサポートが弱い立場に置かれている人達のくらしを、具体的な政策としてどう守っていくのか、それが問われていると思います。現実はいかなにか公助が受けられないために自助、共助などして頑張っても出来ない弱い立場の人が、ますます誰も助けてくれないという孤立感と絶望感に追い込まれ、苦しんでいるという、数多くの女性の声が命の電話に届いています。

オクラの山たより (60)

困了生

一

先日のことです。二十年ほど前に京都国立博物館で開かれたレンブラントの展覧会で手に入れた図版を見ていたら、十七世紀のオランダに生きていたこの画家の光と影のとらえ方が他の画家のそれとずいぶん違うという思いが突然わいてきました。そのことは彼の描く肖像画で顕著です。描く対象の人物のまわりを暗くして対象にのみ光を当てて対象の容姿を浮かび上がらせる手法をとった絵はいくつもあります。レンブラントの描く光は他の画家のそれとはまったく異質であると感じさせます。彼の光は対象の表面を照らすというよりも、その内面にある魂を照らし人物であれ、物であれ対象そのものから光を発しているかのように見えます。このことは同時代しかも同じオランダに住んでいたフェルメールの描く光と比べてみればよく分かります。多くは残っていないフェルメールの作品は窓ガラスを通ってくるやわらかい陽光が室内を照らしているものがほとんどです。その光はレンブラントの光とは違い、静謐で満ち足りた空気の漂うオランダの日常生活にふさわしい叙情性が漂っています。この二人の絵を見比べてみると画家というものが光に対していかに鋭

敏に反応しているかがよくわかります。それが十七世紀の西欧の画家の特質であるかどうか、西洋の絵画史にうとい私には分かりませんが、光をいかに表現するかが一人一人の画家の個性を浮き立たせるものであることはよく理解できます。ここで一つの連想がわきます。レンブラントもフェルメールも十七世紀に生きた人でした。同時代の日本には松尾芭蕉がいます。そういえば芭蕉も光に敏感な俳人であった、と。

二

光に関わる芭蕉の句を「おくの細道」から思いつくままに選び出してみます。

- ① あらたうと 青葉若葉の 日の光
- ② 五月雨の 降り残してや 光堂
- ③ 雲の峰 幾つ崩れて 月の山
- ④ 荒海や佐渡に横たふ天河 (あまのがわ)

①の句では日光の山にあふれる明るい光、暗い光をそれぞれにみごとにとらえています。日光の山々に清新な風が吹き抜け「青葉若葉」にはきらめいている初夏の陽光。山の森には「木の下闇」も蔵されているでしょうから「日の光」はその暗闇を背景にいつそう鮮やかに輝いていたことでしょう。

②の句の「光堂」は平泉中尊寺の金色堂。実際は韃堂におおわれて金色堂を直

に見ることはできません。しかし、芭蕉の想像力の中では「光堂」は、それ自体が五百年の時を経て得た魔力か、降りしきる五月雨の暗さの中でも燦然たる黄金の光を放って立ちあらわれてきます。それは五百年の歴史を奥に秘めた重厚な光といえます。

芭蕉は昼間のきらめく光だけではなく夜の中での光にも敏感でした。

③の句で描くのは夏の入道雲の姿がようやく消えた夕暮れの頃。それに代わっていつの間にか空には月が浮かんでいる。月の光が月山を照らしています。それは静寂感ただよう淡い光です。

そして④の句では黒々と広がる荒海の上には音もなく流れている銀の砂をまき散らしたような光の河。天の川を描いています。その光は天上の世界から来る光であり、「不易流行」の自然・宇宙の真理を示唆する輝きでもありました。

これらの句にあるのは俳人芭蕉の想像力がとらえた闇の中をただよう光、闇の中から湧き出てくる神秘の力を合わせ持った光です。それは目に映る実際の光とただだけではなく、ある象徴性を帯びたそして現実の存在を超越した形而上学的な光であるともいえます。

三

さて、それでは芭蕉没後八十年の京に

生きた蕪村です。天明の俳人蕪村の句を芭蕉と同じく「光」ということからみていくとどうなるか、です。

蕪村も自然・人事のなかでさまざまな光を句にしていたことはいまでもありません。「蕪村俳句集」(岩波文庫 1988年刊)を開いてみれば次のような句があります。

- ⑤ 海手(て)より日は照りつけて山桜
- ⑥ 朝日さす 弓師が店や 福寿草
- ⑦ 三井寺や 日は午(こ)にせまる 若楓
- ⑧ 若竹や 夕日の嵯峨と なりにけり
- ⑨ 日は斜め 関屋の檜に とんぼかな
- ⑩ 落つる日のくぐりて染むる蕎麦の莖
- ⑪ 水鳥や 夕日江に入る 垣のひま

こうして蕪村の句を並べてみると、芭蕉の句にただよう神秘性を帯びた気高い芸術の香りからはまったく別の空間へと飛び出して、世界が一変したかのように感じます。これを明治の正岡子規と彼のまわりに集う人たちは蕪村の句の「絵画的性」と呼んだのでしょうか。

これらの句には画家でもあった蕪村の眼前の景色の光量や色彩、そして構図に対する確かな感覚が見られます。蕪村のこれらの句を見ていると芭蕉は天地にある摩訶不思議な力に交感する俳人であったのではと思えるほどです。かたや蕪村はそういった形而上的なものや歴史的な重みを背負ったものにまったく頓着して

いません。たとえば⑦の句で「三井寺」という歴史ある地名を使っていますが、単に地名を示しているだけであり、そんなことよりも目前の光の微かな変化に注目しています。そして、右に上げた句のいずれもが光源とその光に照らされる物との関係が明確で句を読む人にはその光の筋までもがくつきりと見えるようです。

これこそが蕪村の句の特徴だと言いつ切る自信はありませんが、おもしろい点です。「海手」からの明るい朝日が「照りつけ」ている山腹にひときわ白く浮かび上がる満開の山桜を詠む⑤の句。弓を並べて飾った弓師の店に矢のように射し込んできて店の奥にある福寿草の黄色を照らすという、すがすがしい正月の朝の光を詠む⑥の句。どれも著名な写真家が撮ったように印象的で鮮明な映像といえます。

そして、細くしなやかに伸びる若竹の群れに嵯峨の夕日の斜線が交差する⑧の句。そして人気(ひと)のけのない関所の外に立てられた数本の檜の先に秋の斜陽が当たって、そこに止まったトンボの羽だけがきらめく⑨の句。また、一面の蕎麦畑のあなたに秋の日が落ちかかき、その紅の光が畑にあたり細い赤い蕎麦の茎をひととき繊細に赤く染め上げるといふ⑩の句。これらの句を見ると蕪村は繊細な美の表現を特徴とした十八世紀ころの西欧の絵画を見るようです。

この蕪村の美的感覚は芭蕉の「光堂」や「天河」の句にある形而上学的な世界へ

と読む人をいざなっていく不可思議な光とはまったく異なる方向へと向つていき、たとえば、⑪「水鳥や 夕日江に入る 垣のひま」や

⑫ かなしさや 釣の糸吹く 秋の風

などの句にあるように実在する繊細な光とそれに照らされた微細なものへと進んでいっています。水鳥が遊ぶ川に夕日が照り映えて、その光が一筋垣根の隙間から漏れてくるという⑪の句。⑫の句で詠まれているのは秋風の吹いていく水の上に微かに光りながら弧を描いている釣り糸、なかば見えなかつた見えないまま風に吹かれている釣り糸の曲線です。この曲線ほど細く、美しく、頼りとするなものも持たない、はかなげなものはないでしょう。ここまでくると実景と作者の詩的な幻想とがもはや渾然としていてその境目が見えにくくなっています。

四

この幻想的な色合いがグッと増していくとそこには今まではなかつた別種の光が出てきます。たとえば次の句です。

- ⑬ 細き灯に 夜すがら雛の 光かな
- ⑭ 春雨や 小磯の小貝 ぬるるほど
- ⑮ みじか夜や 芦間流るる 蟹の泡
- ⑯ みじか夜や 浅井に柿の 花を汲む

これらの句の中には柔らかな、あるいは鋭い光を宿しているながら、それらがわずかに外に漏れてきたり、射し出でたりしてかのように見えます。そして、この光を出発点として作者の幻想はふくらみ、読む人は蕪村の夢幻的な世界に引きずり込まれます。

たとえば⑬の句です。春の夜の深い闇の中にたった一つかすかに揺れる灯の明りを映して浮かび上がる内裏雛の、上品で白い小さなお顔。そのお顔から光が発しているようにも見えます。光はかすかですが、くつきりとそれでいて幻想的な映像を私たちにみせてくれます。

⑭の句では春雨が細やかに降り始めたどこかの浜辺に小さな貝がわずかにぬれて薄紅色をにじませている情景です。遠い記憶の彼方にある貝の微光であるとともに、若い女性の唇の色もしくは細い指先の爪のつややかな小さな光というイリュージョンと重なっているといえれば少し想像が過ぎるかもしれませぬ。

「雛の光」も「小貝」の艶(つや)も俳人蕪村の眼が現実に見たものというよりも、それを小さな核としてそこから作り出されていった詩的な夢想のきらめきといえるものでしょう。

また、蕪村には「みじか夜や」で始まる句が多くあるように、蕪村は短い夏の夜、その夜明けがさわやかで、かつ微妙な光の美しさをもつことの再発見者でもあり

次の句を詠んでいます。まさしく死の寸前の句、辞世の句です。

しら梅に明くる夜ばかりとなりけり

「ばかり」とは「くらい」という意味で漠然とした時刻を表わしています。季節は初春。おぼろげな光がたゆたっている払

暁です。混濁しつゝあつた意識の内奥にほの白い光が浮かび出て、やがてその光点が広がっていつて「しら梅」となり、さらにその「しら梅」から光の世界が広がりが自分がしだいに包まれていく。そうした淡い光と時間の表現が「しら梅に明くる夜ばかり」なのでしょう。淡い光の中にあつてその光に照らされた自己の姿。蕪村の辞世の句にふさわしい作品といえるかもしれません。

【補足】

本文中で紹介した蕪村辞世の句「しら梅に明くる夜ばかりとなりけり」が詠まれる前後の事情について弟子の凡菫が記した『夜半翁終焉記』から抜き出してみます。

(天明三年十二月) 廿四日の夜は病

態いと静かにて、言語も常にかはらず、やをら月溪(弟子の松村呉春)をちかづけて、「病中の吟あり、いそぎ筆と

るべし」と聞こゆるにぞ、やがて筆硯・料帚(りょうし) 帚は紙のこと) やうのもの取り出づる間も心あわたしなく、吟声を窺うに、

冬鶯 むかし王維が 垣根かな
うぐひすや 何こそつかす 藪の霜

と聞こえつ。なお工案の様子なり。しばらくありて又、

しら梅に明くる夜ばかりとなりけり

「こは(初春)と題を置くべし」とぞ。

この三句を生涯の語の限りとし、睡れるごとく臨終正念にして、めでたき往生をとげたまひけり。

『夜半翁終焉記』によれば廿二、廿三日の夜、蕪村は「ことに打ちうめきておはす」という状態でしたが、蕪村は死の苦しみを何ももらしませんでした。そして、いよいよ死の間際になつて残したのは、冬の鶯と白梅の白さから徐々に白んでいく美しい早暁の幻想の句でした。蕪村は最後まで美しい光のイリュージョンの俳人でありました。

隠された歴史(35)

満田 正賢

私は、「隠された歴史(3)」で「隋書に記された倭王『阿每多利思北孤』は蘇我馬子である」という仮説を紹介しました。今回は、新しく得た知識を加えてその話を展開します。

古田武彦氏は「古代は輝いていたⅢ」という本の中で、「阿每多利思北孤は九州王朝の天子である」という仮説の論証を行っています。一方、その本の中で元興寺(飛鳥寺)の「丈六光銘」の「元史料」の存在に触れています。その理由としては、蘇我氏の人名表記問題のように、他にない原資料をもっている点と、「畢竟して法興寺に坐す」という文面には、法興寺に安坐する前に、この仏像の真の成立経緯が(光背銘に)記されており、それを今回は省略するといった文趣が感ぜられるという点の二点をあげています。そして古田氏は、この考察の最後に補足として括弧付きで『原光背銘』には、蘇我氏の功業が賛美されており、『新作光背銘』では、これらがカットされた、という可能性もありえよう。このようなケースならば、『原光背銘』は六四五年(入鹿惨殺)以前の成立、『新作光背銘』はそれ以後、天平一九年(七四七)の牒成立)以前の成立となる」と付け加えています。

山崎仁礼男氏が「蘇我王国論」の中で明らかにした、日本書紀が隠した史実の一

つは、推古十四年(六〇六)五月五日の記事にある『朕』が蘇我馬子を示しているということですが。

「鞍作の鳥に勅して『朕は、内典(仏教)を興隆したいと思ひ、寺院を建てようとして、初めて舍利を求めた。そのとき、汝の祖父の司馬達等が、すぐさま舍利を献じた。』」

この記事は、敏達紀十三年(五八四)の是歳の条文「この歳、蘇我馬子宿禰は、その仏像二軀を請ひ、鞍部村主の司馬達等、池辺直氷田を遣つて、四方に使して、修行者をたずねもとめた。……(中略)……このとき、達等は、仏舍利(釈迦仏の骨)を齋の食(物)の辺で得た。すぐに舍利を馬子宿禰に献じた。」という記事を受けており、『朕』は蘇我馬子のことになります。

この発見によって、日本書紀は蘇我馬子の行動を天皇の行動に置換えて記している、という点と、推古十四年(六〇六)「夏四月八日、銅、繡の仏像を造りおえた。この日、丈六の銅の像を元興寺(飛鳥寺)の金堂に(鎮)座した。」という記事は、元興寺(飛鳥寺)が蘇我氏の氏寺であることを証明している、という点の二点が明確になります。

隋書倭国伝の「都斯麻国・一支国・竹斯国・秦王国・十余国を経て海岸に達する」という行程から推定出来る目的地は近畿です。古田史学の中では裴世清一行の目的地は九州内部にあったという説が有力ですが、古田史学の会会員の野田利郎氏

が、裴世清一行の目的地が難波であったということをも古田史学の会の例会で論証しています。(「倭王の都への行程記事を読む」『隋書』倭国伝の新解釈) (古田史学会報 No. 188)

隋書倭国伝の原文を掲載します。

「明年 上遣文林郎裴清使於倭国 度百濟行至竹島 南望聃羅國經都斯麻國迥在大海中 又東至一支國 又至竹斯國 又東至秦王国 其人同於華夏 以為夷洲疑不能明也 又經十餘國達於海岸 自竹斯國以東皆附庸於倭倭王遣小徳阿輩臺 從數百人設儀仗鳴鼓角來迎 後十日又遣大禮哥多毗從二百餘騎郊勞既至彼都」

隋書倭国伝には海岸(難波)で歓迎式典後を受けた後、十日後に又二百騎を従えた使いが来て都に迎え入れたという記述があり、海岸と倭王の住む場所との距離を感じさせます。道中の風景の記述がないのは、この記述が倭国の文化・風俗を記した段落ではなくその後の段落にあり、その段落では「都斯麻国・一支国・竹斯国・秦王国・十余国を経て海岸に達する」という簡単な記述で、すべての行程が記されているからであると考えます。

又、「郊勞既至彼都」の中にある「郊勞」とは、広辞苑では「客を郊外に迎え入れて慰勞すること」とあり、延喜式には、外国使節を、入京する前に郊外で出迎

える「郊勞使」という官職が載っています。すなわち海岸(難波)は都ではない。裴世清一行が都の近くまでやってきて、郊勞使の出迎えを受け、すでに都に到着したことを知った、という史実を記している

と解釈できます。蘇我馬子には、「五八七年に発願され五九六年に完成した法興寺を充実させる為に、六〇〇年に隋に使者を送り支援を要請した」という適時な理由があります。法興寺関連記事と日中の外交記事の一覽を次に示しますが、遣隋使の派遣が法興寺建立の直後に行われ、その後、隋に対し「近畿王朝(蘇我執権)の正統性を主張するために「天皇記」が編纂され、蘇我馬子の死後、初めて遣唐使が派遣されたという时期的な関係があることが推察できます。

五八七(用明二年)…物部守屋を討つにあたり、蘇我馬子が願をかけ、勝利後飛鳥の地に法興寺を建てた。(日本書紀)

五九二(崇峻五年)…法興寺の仏堂と歩廊とを建てた。(日本書紀)

五九三(推古元年)…法興寺の心柱を建て、仏舍利を心柱の礎石の中に置いた。(日本書紀)

五九六(推古四年)…法興寺が落成した。(日本書紀)

六〇〇(開皇二十年)…阿每多利思北弧の使者が隋に来る(隋書倭国伝)

六〇六(推古十四年)…銅、繡の仏像を造

りおえた。(日本書紀)

六〇七(大業三年)…阿每多利思北弧の使者が国書を携え、沙門數十人と共に隋に来る。(隋書倭国伝)、(日本書紀)

六〇八(大業四年)…裴世清が倭国に派遣され倭王に会う。(隋書倭国伝)、(日本書紀)

六〇八(大業四年)…遣隋使(隋書煬帝紀)、(日本書紀)

六一〇(大業六年)…遣隋使(隋書煬帝紀)

六一四(推古二十二年)…遣隋使(日本書紀)

六二〇(推古二十八年)…「国記」「天皇記」完成(日本書紀)

六二六(推古三十四年)…蘇我馬子死去(日本書紀)

六三二(貞観五年)…倭国が朝貢。高表仁を倭国に派遣するが倭国の王子と

六四五(皇極四年)…乙巳の変

六四八(貞観二十二年)…倭国王が再び新羅の遣唐使に上奏文をことごと

けてあいさつをしてきた。(旧唐書)

日本書紀の法興寺・元興寺・飛鳥寺が同一の寺であり、元興寺に設置された丈

六仏が飛鳥寺にある飛鳥大仏であることについては、通説では常識的に考えられていますが、実は日本書紀を見てもそれが同じ寺であるとは書かれていません。

古田史学の中ではそれを懐疑的に考える人もいます。私は通説的な解釈をしています。その為には考古学的証明が必要だとも考えています。

奈良文化財研究所(奈文研)による飛鳥寺跡調査結果によると、飛鳥寺の伽藍については、発掘調査実施以前は四天王寺式伽藍であると考えられていましたが、一九五六年(昭和三十一年)から一九五七年(昭和三十三年)の発掘調査の結果、当初の飛鳥寺は中心の五重塔を囲んで中金堂、東金堂、西金堂が建つ一塔三金堂式の伽藍であることが確認されています。

飛鳥大仏の大きさは座高二・二七mであり、丈六(約四・八m)仏が坐っている姿です。調査結果は飛鳥大仏が、飛鳥寺跡の中金堂の位置に配置されており、今も建立当時の位置を変えていないことを確認しています。

奈文研による飛鳥寺発掘調査報告書(昭和三十三年)によれば、飛鳥寺は他に例を見ない様式の伽藍配置です。石田茂作氏による百済の軍守里廢寺調査(昭和十一年・十二年)、東南里廢寺調査(昭和十三年)の結果がいずれも四天王寺様式伽藍配置であったこと、法隆寺の若草伽藍が四天王寺様式伽藍配置であったこと(昭和十四年)から、調査チームは四天王寺様式伽藍配置を想定していましたが、想定が裏切られたことにショックを受けたようです。但し東西金堂の配置は国内に例がなく、高句麗都平壤の清岩里廢寺、

百済古都扶餘の扶餘山廢寺、錦城山廢寺、平済塔廢寺に類例が見いだせるとしています。

「飛鳥寺(法興寺)は新羅の皇龍寺をモデルにして建立された」という表題のブログ記事の筆者は、日本書紀の仏教公伝においては新羅と百済が置換えられていると考えています。そして、「皇龍寺(左右金堂再建は五八四年)は飛鳥寺(法興寺)(造営発願は五八七年)の三年前であり、皇龍寺の再建に関わった寺工が直接、左右金堂を塔と並列させた模型を作り、蘇我馬子天皇に提示することが可能である。法興寺の伽藍配置は皇龍寺をモデルに進化させた最新様式である。」と述べています。

皇龍寺が一塔三金堂式の高句麗式伽藍を採用した時期は確定的なものではなく、むしろ、推古十三年(六〇五)に丈六仏を造ろうとした時に「高麗国の大興王(嬰陽王)が黄金三〇〇両を貢上した」という記事がありますので、高句麗の僧・寺工が直接関わった可能性の方が高いと思われるます。

飛鳥寺のすべてが新羅の工人によって造られ、百済の影響はないとする意見には賛成できませんが、同時代の藤ノ木古墳(奈良県斑鳩町)の副葬物である鞍が最も新羅的な特徴を備えていることから、六世紀後半の大和(蘇我馬子)が新羅や高句麗の影響を受けていたことは間違いないと思われまます。

国立天文台の谷川清隆氏は、日本書紀に隠された天群の人々の記事(七世紀に実際に天文観測をしていた形跡のある巻が森博達氏の漢文の違いによって分類した天群に属する巻と一致する。これを天群の人々の記事と名づけ、九州王朝の人々の記事だと考える)と地群の人々の記事(同じ七世紀でも天文観測をした形跡のない巻が森博達の漢文の違いによって分類した天群に属する巻と一致する。

これを地群の人々の記事と名づけ、近畿王朝の記事だと考える)との違いの一つは新羅と交流記事の内容(天群の人々は敵対的、地群の人々は友好的)にあるとしています。(「白村江を戦った倭人―『日本書紀』の天群・地群と新羅外交―」『古代に真実を求めて―古田史学論集第二十三集』収録)

日本書紀は九州王朝に百済から仏教が伝わったことを近畿王朝の歴史と偽って記しているため、奈文研の考古学者の人達は、飛鳥寺遺跡を百済との関係の中で考えるという限界をもっています。しかし、地群の人である蘇我馬子が建てた飛鳥寺(法興寺・元興寺)(五八七年発願)が新羅の当時最先端の寺建造技術、又は高句麗の寺建造技術によって建てられたとなれば、谷川氏の考察に沿ったものになります。

遣隋使の派遣は三回。隋書倭国伝の最後は「此後遂絶」で終わっています。これは蘇我馬子(蘇我執権)との交流が三回目

の遣隋使(六一四年)をもって終わったことを示していると考えます。

旧唐書によれば倭国の朝貢が始まったのは貞観五年(六三二)、蘇我馬子の死(推古三十四年・六二六年)の五年後です。山崎仁礼男氏の「蘇我王国論」を批判的に考察する中で私が想起した仮説によれば、遣隋使の主体は近畿(蘇我馬子)であり、一方、遣唐使の主体は九州王朝で、近畿勢力も九州王朝の遣唐使に参加したと考えられます。唐の使者高表仁と礼を争った倭国の王子は九州王朝の王子であると考えられます。二回目の遣唐使は、貞観二十二年(六四八)で、最初の訪問からは十七年も間があります。そして、その後遣唐使は連続的に派遣されています。この二回目の遣唐使は乙巳の変の三年後であり、近畿勢力は乙巳の変の後九州王朝の配下という立場を鮮明にしたと考えます。倭王を僭称していた蘇我本宗家が滅亡したということが、九州王朝による遣唐使が二回目以降本格化することの理由であると考えます。

次回は、「遣隋使と遣唐使の遣使の主体が異なる」という仮説について掘り下げたいと思います。

「熊野街道」(一六)

これまで平安時代の公式参詣路だった紀伊路と中辺路を歩いてきましたが、庶民の巡礼が盛んになる江戸時代に状況を呈したのが伊勢路です。伊勢路は伊勢神宮から紀伊半島の東部を南下して熊野三山に至る古道です。「伊勢へ七度、熊野へ三度」という言葉もあるように、庶民の伊勢参りや西国巡礼が盛んになる近世によく利用されました。主に東国からの旅人が伊勢神宮参拝後、熊野へ向かったのです。伊勢路は伊勢本街道と分岐する田丸から始まりますが、伊勢と紀州の国境でもあったツヅラト峠あたりから歩くのがお勧めです。

東紀州地域振興社というところが、ガイドマップを発行していて、その末尾に伊勢路手形ラリーの案内が書いています。ツヅラト峠、荷坂峠、三浦峠、初神(はじかみ)峠、馬越(まこせ)峠、八鬼山(やま)越え、羽後(はご)峠、曾根次郎・太郎坂、逢神坂(おうかみざか)峠、大吹峠、観音道、松本峠、横垣峠、風伝(ふうでん)峠、通り峠、浜街道スタンプ設置場所を踏破すると「紀州のひのきの完歩手形」を郵送してくれます。私のお気に入り、完歩記念に書斎に飾っています。

伊勢路は、これらの通過点を経て熊野速玉大社や熊野本宮大社へ向かいます。

ここでも、初心者から中級向きのコースを選んで紹介することにします。

① 梅ヶ谷駅からツヅラト峠を越え紀伊長島へ

無人駅のJR梅ヶ谷駅の改札口を出て、左へ地下道で線路を潜ると、八柱(やっしち)神社前の広場に出ます。この神社は地元の産土神を祀り、ツヅラト峠などへ向かう旅人が道中安全を祈願したといえます。古道標識に従って進むと広い舗装道路につき当たる。左折し、川口前橋を渡り、紀勢自動車道を潜り、寺浦橋、汲泉寺前を通り、中野橋を渡るとまもなく定坂公園に着きます。休憩所やトイレが整う小公園です。公園の道路を挟んだ反対側の駐車場広場に、個人寄進の「花山院熊野権現遙拝所」の碑が立っています。若き花山法皇が熊野参詣の途次に熊野権現を遙拝した地との伝承があるといえます。また広場の左隣の丘には法皇にちなむミニ三十三観音巡りコースも作られています。

小公園からは道標に従って、川沿いの道路を左に進みます。栃古(とちこ)橋手前で溪流沿いに整備された歩行者専用道路を歩きます。やがて舗装林道に合流し、しばらく林道を進み、高野橋手前を左にそれると、ようやくツヅラト峠登り口(栃古口)に到着します。

ここから右の林の中へと通じる細道が峠へのルートで本格的な山道となります。

三〇分ほど坂を登ると、頂上の直前で舗装林道に出ます。斜め向かいの手摺のある階段を上ればツヅラト峠です。この峠は伊勢と紀伊の国境でした。かつて伊勢方面から熊野へ向かう参詣者は、この峠に立って、初めて熊野灘の海を目にしました。長島港を見下ろし、熊野灘の水平線が遠望できる見晴らし台からの眺望には心癒されます。峠には石碑とともに東屋も立っていて昼食休憩にも適しています。

ツヅラト峠は登りよりも下りの方が長く、古道の雰囲気も豊かです。下り始めは直降する急坂です。その後、峠名の由来でもある九十九折れの坂を下ります。途中、古道を支えるため「野面(のづら)乱層積み」といわれる手法で築かれた石垣、「山の神」と呼ばれる小さな祠などが見られます。やがて石畳道が現れ、下りにしたがって立派なものになっていきます。石畳道の終点がツヅラト峠の志子(しこ)口登り口です。志子口から石で階段状に築かれた沢の石堤を上がると、舗装林道終点の広場になっていて道標があります。そこからは林道を進みますが、花広場を過ぎると志子休憩所に着きます。その先に案内板のあるトイレも整備されています。ここから紀伊長島駅まではずっと舗装路です。

梅ヶ谷駅から栃古口、そして志子口から紀伊長島駅の舗装道路区間はけっこう長いです。のどかな風景を味わう機会と考え、田園散歩を楽しみましょう。

② 馬越峠を越えて尾鷲の街へ

馬越街道はこの地方の幹線道路として江戸期に整備され、旧国道ができる大正六年までは県道でした。今も麓から峠への約二キロメートルの多くが石畳道となっており、当時の面影がよく残っています。伊勢路隋一の石畳道と言ってよいでしょう。

JR相賀(あいが)駅から西へ歩き国道四二号線へ向かいます。国道の一筋手前の角に相賀神社があります。その角を左折して道なりに進むと真興寺があり、突き当りの堤防脇の階段を上ると国道の銚子橋に出ます。銚子側に架かる橋を渡り町営グラウンドを右に見ながら銚子川に沿って約三〇分ほど歩くと道の駅海山(みやま)に着きます。トイレ休憩をして一〇分ほど国道を進むと鷲毛(おしげ)バス停。その左手が峠道の入口です。登り口の階段は新しいですが、道が植林の中へ入っていくと、やがて江戸期の古い石畳道になっていきます。美しい石畳の道を二〇分ほど歩くと夜泣き地蔵に出会います。もともと旅人の無事を祈って祀られたようですが、いつしか地元の「子の夜泣き封じ」を祈願する地蔵に変わったといえます。昔から赤子の夜泣きに泣かされる親がいたのでしょう。

地蔵祠から少し行くと、狭く深い溝を渡る一枚岩の橋があります。石畳道の作

り手であった石工の遊び心だったのかも知れませんが。尾鷲地方は日本有数の豪雨多雨地方ですから、雨から道を守り、草木の繁殖を防止するために石畳の道が整備され、山水を谷側へ流す「洗い越し」という排水溝も各所に設けられています。

石が積まれただけの馬越一里塚跡を過ぎると勾配が強くなります。やがて右側の視界が開け、林道との交差点に出ます。近くのベンチのある小広場からは雄大な景色が見られ、休憩に適しています。

林道交差点からほどなく馬越峠に着きます。昔ここに地藏堂や茶店がありました。石垣で囲われた茶店跡に江戸末期の俳人・可涼園桃乙（かりようえんとういつ）の句碑が立っています。「夜は花の上に音あり 山の水」です。その横から左に天狗倉山（てんぐらやま てんぐらさんとも読む）への枝道が通じています。峠から往復約一時間ですが尾鷲湾の絶景が見渡せ、足を延ばしてみる価値は充分あります。標高五二二メートルの頂上に天狗岩という大岩があります。役行者像と不動明王像を祀る祠があり、修験道との関連がうかがわれます。ロッククライミング気分です。

鉄の梯子を攀じ登ると二〇畳ほどもある広さです。大岩の上からも、祠と反対の海側の低い岩盤からも熊野灘一帯がパノラマ展望できます。海側の岩盤の上には山の名前の解説板が設置されています。

峠からの下りも多くの部分が石畳道です。途中で出会う桜地蔵は、旅人の安全祈

願にと奉納され、元は石造りの祠でしたが、レンガ造りに改築され「安兵衛地蔵」

「夜泣き地蔵」とも呼ばれたそうです。

さらに下ると展望台への分岐があります。約一分で行ける展望台の東屋からは尾鷲市街が展望できます。そのすぐ下の馬越峠公園は市民の憩いの場です。役行者を祀る行者堂が立ち、そこから西へ約一〇〇メートル散策路を行くと馬越不動尊・不動滝もあります。

公園からは舗装道路を下ります。馬越墓地を抜けると右手に尾鷲神社の社が見えてきます。北川に架かる北川橋を右折すると尾鷲神社・金剛寺が並んでいます。かつての「神仏習合」の名残が見られます。北川橋を渡り、直進し、少し歩いて右折すると尾鷲駅へ向かう道です。

マルクスから学ぶ(7)

成瀬 和之

「政治の逆立ち」について、前回は橋本徹的政治手法の基本的な手口とその手口への対抗方法を考えました。今回はその続きです。

もう一つの手法は、「思考停止の強制」です。そのために論理的に矛盾したことを、別々などころで、しかしほぼ同

時に行っておくという発言の仕方をする。例えば、「教育とは二万%、強制」と言いながら、一方で「世界標準で競争力の高い人材を育てる」というようなやり方です。自由がなければ「競争」はできません。明らかに矛盾した発言です。このように、同時にあの手この手のパフォーマンスを連続的に繰り返して、有権者に「少し考える」余裕すら与えないで、明らかに矛盾することを言い続けていくのです。

こうした発言を繰り返されると、有権者は論理的な矛盾に気づかなくなり、いつの間にか「白か黒か」の二者択一をさせられることとなります。橋本氏が、公務員や教員を偽りの敵に仕立て上げていく中で、有権者の思考は停止させられてしまうのです。つまり、民主政治の要である政策的思考を有権者から奪い、政治的政策的選択をするという最も大切な権利を、知らないうちに奪ってしまうというのが、「思考停止の強制」という手口なのです。

政策的思考を奪われてしまうと、どのような政策をどのような理由で自分としては「よし」とするのかは一切考えられなくなり、結果として有権者の意識の回路は、善玉か悪玉かという紋切り型をいくつも組み合わせるだけの連続となってしまう。 「教職員組合」などをずつと悪玉と描き出したうえで、そこに「憲法九条」を加えて、「憲法九条」を教え

てきたのは「教職員組合」ではないかと悪玉連鎖をつくと橋本氏の善玉性はゆるぎなくなるのです。紋切り型の二者択一の連鎖へのはめ込み、これが橋本流扇動手法の手口です。

こういう手法があまり通る背景として、「学校を通じて押し付けられる『綺麗事』の支配への反発もありません。学校現場には、入試問題などにおいて「〇か×か」二者択一を迫るものがあります。また、校則問題などに人権抑圧を含むものがあることが指摘されています。いじめ問題の隠ぺい体質も払拭されていません。そういった問題を抱える「学校への反発」が、学校や教科書で教える「真実や正義への反発と否定に短絡してしまう」という要因もあるでしょう。（もちろん、そういった問題に立ち向かう先生たちの懸命の努力の一面が見逃されているのですが。）

こうした橋本流の手口にはめられないためには、原因や理由と結果との因果関係を論理的に問う、「なぜ？」という問いをどれだけ連続させられるかが重要です。今、目の前の現実として発生している、一連の事態の原因や理由を問うことによつて、現状の生きづらさが、誰によつて、また何によつてもたらされているのかをつきとめ、現状を変えるにはどうしたらいいのかを、粘り強く議論し続けることが大切です。

「憲法九条の会」事務局長の小森陽一さんは、「橋本氏の騙し」に対抗するために三回「なぜ？」と問うことを提唱しています。一つの問題に関して、少なくとも三回問いかけると、どこかにウソのある議論はたいはいほころびが見えてくるというのです。

例えば、Q「なぜ橋本氏や『維新の会』は、公務員や教職員を非難して条例で縛ろうとするのですか？」A「きちんと知事や市長の命令を聞いて働かないからだ」Q「なぜ知事や市長の命令どおりに働かないのですか？」A「公務員はちやんと働かなくてもクビにならない身分保障があるからだ」A「なぜ憲法に反すること（「思想調査」）をしてもよいのですか？」と三回目に問うのです。

思想調査は明らかに憲法違反です。「今の日本の政治で一番重要なのは独裁。独裁といわれるぐらいの力だ」

（「読売新聞」二〇二一年六月三〇日付）という橋本氏の本音が出てきます。これは、ソクラテスの「問答法」（助産術）ですね。「上から目線」でなく、粘り強く議論しながら自ら答えを導き出すのを「待つ」方法です。日本国憲法の根本原則は国民主権です。つまり政治の主人公は主権者なのです。

若いころ「革命をめざす」といっている人たちが、お互いに相手を罵倒しあって「革命闘争を担う資格を持つ人」の条件を厳しくすればするほど「革命の主

体」の頭数が減っていくのに矛盾を感じてきた内田樹さんは「コロナ後の世界」（文藝春秋）のまえがきで、次のように書いています。

「世の中を少しでも住みやすくする」「事業においては、「仲間を増やす」ということが一番大切です。自分と多少意見が違っている人についても、「まあ、そういう考え方もあるかもしれないなあ」と思っ、正否の判断を急がない。中腰で少し耐える。そして、どこかに「取り付く島」があつたら、それを頼りに対話を試みる。

そして、「尖った言葉」が飛び交う今日、お互いに「親切にすること」が大切ではないか？それを「自分の方から一歩を踏み出す。自分から始める。」ことを内田さんは提案しています。傾聴するに値する提案です。こ難しい議論を展開する私には、耳の痛い指摘でした。

「政治の逆立ち」をただすには、生活と暮らしの問題、「経済の逆立ち」にいいよ目を向ける必要が出てきました。「新自由主義とはなにか？」その基礎となる「資本主義とはなにか？」「経済の逆立ち」について次回から考えていきたいと思います。小難しい議論はよくないと思いつつながら。

俳句

土田 裕

閉店の亭主敬白一葉散る
門口に傾ぎしままの茄子の馬
いつの間に八十路に至る盆の月
蛸のおちこちの声重ならず
爽やかや病名知りて帰る道

影山 武司

わが丈の届かぬ空へ天蓋花
重さなき心のごとく海月浮く
電柱の影を濃くして晩夏光
芭蕉布や姉妹のおぼあ正座して
娘より父の手に置く青胡桃
新涼や聞き耳立つる風の声
小石噛む流木白き残暑かな
挿鉢を押さえて母ととろろ汁
穴二つベルトを緩めとろろ飯
風を切る風車の反りや天高し

【「ふみの道草」 39 の続きです】

このドラマの脚本家、山田太一は、『日本の面影』の二年前、一九八三年にフジテレビで放映された『早春スケッチブック』の執筆動機を述べた中でニーチェの言葉を引用している。「いつかは自分自身を、もはや軽蔑することのできないような、最も軽蔑すべき人間の時代が来るだろう」（『ツアラトウストラかく語りき』）「自己軽蔑のない人間こそ最も軽蔑に価する」というこのニーチェの言葉が、「ひそかに自分を支える言葉でした」と。

ハーンが日本に来たのは、日本の大きな時代の転換期。そういう時代は、「最も軽蔑すべき人間の時代」が隠しようもなく露わになる時代でもあった。

氏はまた、「つまるところ、自分の内心の一番の本音は「自分には何も無い」というコンプレックスなのだから、それを根拠にして生きる他ないと思いました。その方が、ありもしない優越を装うより、少なくとも私にとっては、情けないけど、正直に近いと」述べていて、その思いが一年後のハーン理解につながっている。

「お前らは、骨の髄まで、ありきたりだ」「魂に一ワットの光もねえ」と、山崎努が軽蔑すべき人間を罵倒する『青春スケッチブック』と対照的であるが、『日本の面影』もまた山田太一の傑作である。

▼ヒグラシの声はとうに聞いたはずだがまだまだ秋には遠い。正岡子規に「一匙(ひとさじ)のアイスクリームや蘇(よみがえる)の句があるが、暑い日に頭がキンとするほど冷たく甘いアイスクリームを口にするとうれしさが伝わってくる。暑気を払うにはもってこいだ。しかし、夏の暑さはアイスクリームでしのげるが、コロナ禍はまだまだ収まりそうにない。そして、さまざまな問題を残して東京オリパラは幕を閉じ前後して首相退陣のニュースが飛び込んできた。

▼「今度の戦争で敗れた一つの理由は主観的な観念性に走って科学を媒介とした客観性、世界性から遊離したことにあつた」。これは戦争が終わってから五日後の1945年8月20日、京都大学の人文科学研究所長であつた高坂正顕が毎日新聞に寄せた談話である。カントの研究の泰斗であつた高坂正顕は日本人が抱いていた「夜郎自大」ともいえる自己認識、世界認識、そして科学的合理的思考の欠如に敗戦の原因を求めた。これを見ると今の日本が抱える問題の何とよく合う言葉であるかと感心してしまう。非常時という言葉が飛び交う中で政府が示してきた信じられぬほどの楽観論そして希望的観測。五輪開催という国全体が取り組む目標の達成を優先するあまり国民の安全をおろそかにするような議論もあつた。こうした一連の動きからは科学的な知見や客観

性が重視されたとはとても思えない。そして国民が苦しむさなかに菅首相が突然退陣表明をした。総裁再選への見通しがつかず万策尽きた結果だという。「総裁選への出馬をやめてコロナ対策に専念したい」という首相の言葉を信ずる国民はほとんどおるまい。

▼政治学者の御厨貴氏は新聞インタビューに答えて「この一年、日本は首相が空席だったようなものです」といつている。確かに我が国のリーダーとして国民をどこへ導こうとしているのか、何を目標としているかが首相の口から語られることのない一年だつた。語るべき政治理念がなかつたからであらう。

▼東京オリパラについても国民の大多数が開催に反対したにも関わらず、なし崩し的に開催した結果はどうであつたか。さまざまな検証がこれから行われようが、五輪を通して日本の現状を見た世界の人々はどう思つたか。「もっとマシな国だと思つたのに、このありさまはなんだ」という失望感や不信感を与えたのではという心配が杞憂であることを祈るばかりである。

▼忘れてはいけないことがあつた。菅首相には理念が一つだけあつたのである。「自助」である。この理念によってコロナ禍における公助は一貫して軽視された。セルフ・ロッキングダウン、さらには「中等症」患者の自宅療養である。そして、見落とされがちなのは家庭の中で患者の身の回りの世話をする家族のことである。家族のケアをするのは女性が

多く、感染リスクにおびえながら、仕事にも出られぬ状態になつていく。古来、感染症は貧窮者・老人・女性・子どもといった社会的弱者を狙い撃ちするかのようその悪魔のごとき力を発揮する。官邸から窮状に陥つていくこうした人々、特に女性たちを救えという声は聞こえてこない。聞こえてくるのは「公助」ならぬ「自助」の声ばかりである。

▼「欧米の民主主義国と価値観を同じくする」とは保守系政治家がよく口にすることばである。これがウソ八百であると見事に露見したこと、これが菅政権一年の最大の成果ではないか。この一年間、ふだんは表に出ぬ多くの汚点が沸き出してきた。例えば、東京五輪の直前の森喜朗氏の女性蔑視発言、開会式関係者の過去のいじめ問題やホロコーストへの無理解。特にホロコーストの問題は菅首相を仰天させたらしい。ワクチン供給の元締の一つともいふべきファイザー社の会長アルバート・ブーラ氏の両親はギリシア系のユダヤ人であり、その親族の多くはホロコーストの犠牲者であつた。ワクチン接種普及に一縷の望みをつないでいた菅首相の周章狼狽ぶりを思うべし、である。こうしたことで日本は差別的な人もしくは差別に鈍感な人がリーダーになる国だといふ不信感がいよいよ深まったのでは、と心配になる。

▼自民党総裁選のお祭り騒ぎの後、やって来るのは総選挙である。コロナ禍の中、せめて今回だけは熟慮して投票先を決めたい。

詩人の茨木のり子さんは自作の詩「自分の感受性くらい」で言う。

ばさばさに乾いてゆく心を
人のせいにはするな
みずから水やりを怠つておいて

気難しくなつてきたのを
友人のせいにはするな

しなやかさを失つたのはどちらなのか
苛立つのを
近親のせいにはするな
なにかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを
暮しのせいにはするな

そもそもが ひよわな志にすぎなかつた

駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

「するな」の繰り返し心地よい詩だ。茨木さんの詩には何度か元気づけられてきた。今回も茨木さんから「ばかもの」と言われぬよう自分の「感受性」と「思い」を大切にしたい。

